フラナリー・オコナーの “The Artificial Nigger” における「つくりもの」の南部白人

久　保　尚　美

Flannery O’Connor（1925–64）の短編小説 “The Artificial Nigger”（1955）は、ジム・クロウ体制下のアメリカ南部を舞台に、祖父（Mr. Head）が孫息子（Nelson）に社会のありようを学ばせようとする物語である。祖父から孫への「教え」を通して描き出されるのは、社会的アイデンティティの生成と人種意識の構築とが、南部社会において分かちがたく結びついている様子である。そうした状況を描くことでこの作品が明らかにしているのは、南部社会で「白人」が生成される過程であり、そのようにして生成されうる「南部白人」というものの構築性であるといえるだろう。本論文では、オコナー自身が「気に入った作品（“my favorite”）」[1] だと述べる本作に描き込まれた人種の関係性を読み解くことで、自らも南部出身の白人である作家が、故郷南部の白人と黒人のありかたをどのように捉えていたのかを考察したい。

1. 人種意識の構築と「他者化」

人種意識が構築されるプロセスを読み解くにあたり、本稿では Toni

1）短編 “The Artificial Nigger” については、オコナーが友人の Betty Hester 宛の書簡において “‘The Artificial Nigger’ is my favorite”（*Habit of Being* 101）と述べていることがよく知られている。他にもこの短編についてオコナーが書簡に記したコメントに関しては Richard Giannone が “‘The Artificial Nigger’ and the Redemptive Quality of Suffering” において簡潔にまとめている（5–6）。

Morrison の「他者化（“othering”）」の概念を参照する。アメリカ人のアイデンティティ形成における人種意識の重要性に関してモリスンは、*Playing in the Dark*（1992）において、白人作家の作品に書き込まれている「アフリカニズム（“Africanism”）」（6）（白人の思考のなかで創出された黒人とその黒さに関するモリスンの造語）の存在を明るみに出し、白人作家の想像力のなかで「アフリカニズム」が果たす機能や役割を論じる。モリスンは、そもそもアメリカという国においてハイフンなしで「アメリカ人」と呼ばれる白人のアイデンティティの構築そのものが、「アフリカニスト（“Africanist”）」を「他者化」すること――自分自身を定義するために「よそ者（“the stranger”）」を定義すること――に依存してきたとする。かつて旧大陸から新大陸に渡ってきた人々は、黒人たちをまずは奴隷とすることで、そしてその後の移民たちも黒人たちをカラーラインの向こう側の「他者」と位置づけ差別の対象とすることにより、有利な側、支配する側の「白人」としての自己を何世代にもわたり獲得し維持してきた。そしてそうした事態は白人作家による文学作品にも必然的に含まれているのだと、モリスンは次のように指摘する。「明示的であれ暗示的であれ、アフリカニストの存在は、圧倒的で避けられない仕方で、アメリカ文学のテクスチュアに現れており（中略）アメリカ文学のテクストがアフリカニストの存在や、登場人物や、ナラティヴや慣用句に「ついて」書かれたものでない場合でさえ、あるいはそうでない場合にはいっそう、含意や、兆候や、境界線上に、その影が漂っている」（46–47）[2)]。

そしてモリスンは *The Origin of Others*（2017）において、オコナーが「よそ者の構築とそこから得る利益」を鋭く正確に読み取り、正直かつ深い洞察力で描き出していると評価する（19）。そしてその一例として “The

2） モリスンが同書において中心的に検討している白人作家は、Edgar Allan Poe、Mark Twain、Willa Cather、Ernest Hemingway の作品だが、オコナーに関しては、これまでの批評家たちが、オコナーの作品における「神の恩寵とアフリカニストの『他者性』のあいだの結びつきを見て」こなかったと批判し言及している（14）。

Artificial Nigger” を取りあげ次のように考察する。孫に「人種差別主義者の教育」を与えんとする祖父は、彼と連れだってアトランタに赴くが、都会の黒人居住区では自分たちこそが「よそ者」になるという恐怖に苛まれる。だがひとつの黒人の像を前にしたとき、あらゆる階級の白人が共有する人種主義が可視化された黒人の像に「他者」を見いだすことで恐怖から脱し、それにより孫への人種主義の「教育」は完結する（19–24）。本稿では、“The Artificial Nigger” が白人による黒人の「他者化」のプロセスを描いているというこのモリスンの読みを踏まえ、そのプロセスをめぐる作品内のエピソードの細部に着目することで、最終的に二人を変化させるのがなぜ黒人の「像」であったのかを検討し、オコナーが南部における人種の関係をどのように見ていたのかを考察したい。

2. “The Artificial Nigger” における人種意識の構築

“The Artificial Nigger” は、次のような展開を持つ物語である。孫のネルソンと二人きりで田舎に暮らすヘッド氏は、孫を列車でアトランタに連れて行くことにする。その目的は、アトランタ生まれである――とはいえ、一歳にもならないうちに母親とともにヘッド氏の元へやってきた――ことを鼻にかけ、祖父に対する優越感に浸る孫に、都会の現実を見せて教訓を与えることであった。しかし二人はアトランタで道に迷い、さらにネルソンが一人の女性と衝突して騒ぎを起こしてしまったときに、ヘッド氏はネルソンを知らないといって他人のふりをする。その結果、これまでになく二人のあいだの溝が深まる。だが一軒の家の前に置かれていた黒人の像を目にしたとき、二人に変化が訪れる。その後二人は再び列車に乗って帰宅の途につき、列車から降りた場面で物語は閉じられる。

物語の冒頭に描かれるのはアトランタに向かう朝の祖父と孫の様子であるが、二人が絶えず相手より優位な立場に立とうとしていることが、どちらが早く起きるか、といった些細なことにおいてでさえ相手を出し抜こうとする姿や、なにかにつけ言い争いを続ける様子を通して描かれる（*CW*

210–213)[3]。十歳になる孫のネルソンは、自分がアトランタという都会で生まれたことで、「道に迷う場所さえないところ（“It’s nowhere around here to get lost at”）」[4] に長く暮らす祖父を軽んじ、ことあるごとに自分の優位性を示そうとする（211）。孫のそのような不遜な態度をあらためようとヘッド氏は、六十歳という年齢に伴うはずの叡智を以て自らを「若者の導き手に相応しき者（“a suitable guide for the young”）」（210）に任じ、孫を連れてアトランタへ行くことにしたのである。少年にとって「生涯忘れられないレッスン（“a lesson that the boy would never forget”）」（211）となるべく計画されたこの旅の目的は、以下のように示される。

> He [Nelson] was to find that the city is not a great place. Mr. Head meant him to see everything there is to see in a city so that he would be content to stay at home for the rest of his life.… the boy would at last find out that he was not as smart as he thought he was. (211–212)

ヘッド氏にとって孫が学ぶべき「レッスン」とは、「都会はそれほど素晴らしい場所ではない」と認め、以後は「田舎での生活に満足して一生を送ること」であり、「自分が思うほど賢くない」と知ることである。つまりネルソンが自らの誤りを認めて祖父を敬い、田舎暮らしを生涯続けるということを、彼は願っているのである。

祖父と孫が競い合う背景には、二人きりという彼らの閉じられた家族構成の影響が挙げられるだろう。かつては妻と娘と暮らしていたヘッド氏であったが、妻が死去すると娘は父であるヘッド氏のもとから逃げる。その出奔の理由は明かされないが、娘はその後一歳に満たないネルソンを連れ

3） ページ番号の脇の *CW* は *Flannery O’Connor: Collected Works* の略称である。
4） 引用箇所の訳文に関して、オコナーの作品で既訳のあるものについては下記を参照し、適宜改訳した。参照した訳書は以下の通り。『オコナー短編集』須山静夫訳；『フラナリー・オコナー全短篇　上』横山貞子訳。

て帰郷し、だがまもなくして亡くなってしまう。そして当時一歳のネルソンがヘッド氏のもとに残されたのである（212）。旧南部社会のイメージにおいて、広大なプランテーションに立派な豪邸を所有し、そこに暮らす妻子、そして黒人奴隷を従えることで、人種とジェンダーのヒエラルキーの頂点に君臨する家父長こそがあるべき南部白人男性像であったとすると、新南部の貧しい白人（プア・ホワイト）であるヘッド氏のもとには[5)]、彼の下位に位置づけられる女性も黒人もいない。Doreen Fowler が指摘するように、ヘッド氏がその名の示す家長（ヘッド）という役割を演じられるかどうかは、唯一の家族であるネルソンが、彼をそのように扱ってくれるかどうかにかかっているともいえるだろう（“Deconstructing” 23）。一方、思春期にさしかかったネルソンも、祖父より優位に立つことで自らを成り立たせようとする。二人は両者間の差異によって自らを位置づけるほかない状況にあったのだ。

その差異化にあたり、ヘッド氏がネルソンに無知を知らしめようとして持ち出すのが人種である。アトランタに出かける朝、二人の口論は次第に「黒んぼ（ニガー）」をめぐるものになる。アトランタ生まれであることを自慢にしているネルソンに対しヘッド氏は、アトランタは「黒んぼ（ニガー）だらけ（“It’ll be full of niggers”）」（*CW* 212）だからおまえは気に入らないかもしれないぞ、と忠告する。そして二人の住む郡には黒人が一人もいないのだから、おまえは一度も黒人を見たことがないはずだ、とネルソンの無知を指摘するのだ。しかしネルソンは、自分がアトランタにいた頃にたくさん見ていただろうから、一目見ればそれが「黒んぼ（ニガー）」だとわかると譲らない。

この言い争いの背景を確認しておきたい。黒人の不在についてヘッド氏は、「この郡に黒んぼ（ニガー）は一人もいない。わしらが十二年前に最後の一人を追い出したからな（“There hasn’t been a nigger in this county since we run that one out twelve years ago”）」（212）と誇らしげにネルソンに説明する。

5）　ヘッド氏やネルソンを “poor whites” とする先行研究として、以下を参照した。Joiner 32. Fowler, “Death Denial and the Black Double” 311. O’Donnell 111. Perreault, note 6, 391.

ヘッド氏らが黒人を「追い出した」という二十世紀前半は、白人によるリンチや暴力、差別などから逃れるため、南部の黒人が大挙して北部へと移動した黒人の大移動（グレート・マイグレーション）の時期と重なり、南部における黒人人口は大きく減少した。ヘッド氏の暮らすコミュニティから追い払われたという黒人も、そのようにして南部を去ったのかもしれない。だが、John N. Duvall が黒人の大移動（グレート・マイグレーション）について、「黒人たちの移動の犠牲になるのは、貧しい白人（プア・ホワイト）であった」（8）と指摘するように、黒人たちが南部を去ることによってアイデンティテイの不安に直面することになったのは、貧しい白人（プア・ホワイト）たちであった。南北戦争以前の時代より南部社会の下位に位置づけられていた貧しい白人（プア・ホワイト）たちは、奴隷制度下においては奴隷とされていた黒人たち、そして奴隷制廃止後にもジム・クロウ体制下において劣位に置かれる黒人たちの存在により、権力を持つ白人の側に位置づけられ得た。だが、「黒さ」と対比させることによって「白さ」が認識される南部社会において、黒人の大移動（グレート・マイグレーション）によって生じた黒人の不在は「白さ」を、とりわけそれまでも社会的、経済的に黒人と隣接していた貧しい白人（プア・ホワイト）の「白さ」を、曖昧にすることになったのである（8–9）。

そのように考えるとき、ヘッド氏が孫のネルソンと暮らす黒人不在のコミュニティは、曖昧になった貧しい白人（プア・ホワイト）の白人性という問題を象徴的にあらわすことにもなるだろう。コミュニティ内の「他者」を失ったヘッド氏の白人性は曖昧になっており、また一度も黒人と接したことのないネルソンの白人性はいっそう曖昧である。語り手から示される二人の様子が「それほど年齢の離れていない兄弟に見えるほど似て（“they looked enough alike to be brothers and brothers not too far apart in age”）」（*CW* 212）いるのは、二人がともに「他者」を持たないことにも由来し、それゆえ二人は互いを差異化しようと競い合うのだ。そのような両者にとってアトランタへの旅は、お互い以外に「他者」となる明確な対象を探す旅だといえる。ヘッド氏にとってその旅において「黒さ」というものをネルソンに教えることは、孫の「導き手」として優位に立つだけでなく、自らの「白さ」を

再確認する機会にもなるはずであった。一方のネルソンにとっては、「黒さ」を知ることによって自らの白人性を獲得することになるはずの旅であったのだ。

ネルソンがそうであるように、人種隔離が浸透した南部社会に生まれ、その社会の枠組みのなかで自らが何ものであるかを確認しようとする子どもは、白人か黒人かという二元論的人種のどちらかに自らを位置づけることで、アイデンティティを確立する必要に迫られる。アメリカ南部で育つ白人の子どもが、黒人を人種的に「他者化」することを通して社会化する瞬間は、かねてより文学作品にも描かれてきた。たとえば William Faulkner の “That Evening Sun”（1931）の終盤では、9 歳の Quentin Compson が、コンプソン家の台所仕事を一時的に引き受けていた黒人女性の Nancy の目から「大粒の水滴が顔をつたいはじめ（中略）あごから落ちる（“water began to come out on her face in big drops … dropped off her chin”）」（Faulkner 306）さまをつぶさに見つめながらも、「彼女は泣いていない（She’s not crying”）」（306）と言い放つ場面が描かれる。それはクェンテインが、彼女が苦しんでいることを認めないことによって――そのような「人間らしい」感情があることを認めないことによって――彼女を「他者化」し、白人であることの有責性を回避する「南部白人」としての規範を内面化した自己を確立しはじめる瞬間である。あるいは Carson McCullers の *The Member of the Wedding*（1946）の 12 歳の主人公 Frankie Addams は、女性に許される役割が「妻か花嫁か婚約者か」（Freeman 112）に限定される当時の南部社会の規範から、成長しつつある自分が逸脱してゆくのではないかという不安のなかにある。そして南部社会において「他者」として位置づけられることを回避すべく、作品の終盤でフランキーは、アダムズ家の家事を担い、母親のいない彼女が母親代わりのように慕い信頼していた黒人のメイドの Berenice Sadie Brown を、心のなかで初めて「黒んぼ（ニガー）」（McCullers 144）と呼ぶ。それはフランキーが、黒人という人種的「他者」を得ることによって、自らが周縁化されることから逃れよう

とする心情を象徴的に示す行為である。クエンティンもフランキーも、一家の使用人として近しい関係にあった黒人女性を「黒んぼ」と位置づけることよって、複雑な思いを抱きながらも南部社会の一員となっていったといえるだろう。

モリスンは「生まれながらの人種差別主義者はおらず、（中略）ひとが「他者化」を学ぶのは、講義や指導からではなく、前例によってである」（*The Origin of Others* 6）と述べるが、身近に黒人のいる環境で育ったクエンティンやフランキーと異なりネルソンは、白人だけのコミュニティで人種差別の「前例」を目にすることなく育った。そのような意味においてネルソンは、Jennie J. Joiner が指摘するように「南部の少年らしからぬ育ち方をした」（39）少年であり、作中でヘッド氏のいうところの「今まで何も見たことのない（中略）生まれたときと同じで、まったく何ひとつ知らない（“He’s never seen anything before, … Ignorant as the day he was born”）」（*CW* 215）「無知／無垢」な少年だったといえる。とはいえ、アトランタに行く朝のヘッド氏とのやりとりや、後の列車内での発言からはネルソンが、「黒んぼ」と侮蔑的に呼ばれる人々が存在すること、そしてそれが「黒い（“black”）」人々であることを、ヘッド氏から教え込まれていたことは明らかだ。つまり、その蔑称が指す対象も曖昧なままに、自らが参入してゆく社会には肌の色の「黒さ」による差別が存在し――とはいえ、その「黒さ」を知らないことによって自らの「白さ」も曖昧でありながらも――自分は差別する側のはずであるという思いが、すでにネルソンの内側に刻み込まれていたのだといえるだろう。

だが「前例」を知らぬネルソンは、外見から人を「黒んぼ」だと認識することはできなかったのである。作品の序盤に、ネルソンが初めてその蔑称で呼ばれる対象と遭遇する様子が描かれる重要な場面がある。アトランタに向かう列車のなかで、ヘッド氏とネルソンが座る車両の通路を、よい身なりで「暗褐色の肌をした大柄な男（“A huge coffee-colored man”）」（215）が、同じく暗褐色の肌をした女性二人を連れて通り過ぎる。三人が

その車両から出ていくと、ヘッド氏はネルソンを試すように「今のはなんだ？（“What was that?”）」と尋ねる（216）。するとネルソンは「男の人だよ（“A man”）」と答えるのである。さらにヘッド氏に「どんな種類の男だ（“What kind of a man?”）」「お前にはどんな種類かわからんのか（“You don’t know what kind?”）」などと重ねて問われてもネルソンは、「太った男だ（“A fat man”）」「年寄りの男だ（“An old man”）」と答え続ける（216）。そしてついにヘッド氏が「あれが黒ん坊（ニガー）だ（“That was a nigger”）」と告げるのである（216）。このやりとりによりヘッド氏が、その朝の口論において、黒人を一目見れば「黒ん坊（ニガー）」とわかると豪語していたネルソンの鼻を明かして満足したことは確かであろう。腹を立てたネルソンは「だってじいさんは、そいつらは黒いっていったじゃないか。（中略）茶色だなんていわなかった。おれに正しいことを教えないで、どうやってわかれっていうんだよ（“You said they were black, … You never said they were tan. How do you expect me to know anything when you don’t tell me right?”）」と祖父を責めるが、ヘッド氏は「おまえが無知なだけだ（“You’re just ignorant is all”）」と孫を侮辱するのみである（216）。このやりとりにおいて着目したいのは、ネルソンにとってその男性はあくまでも「人（“a man”）」であり、「黒ん坊（ニガー）」という言葉に込められるような侮蔑に結びつく差異はなにも「見え」ていないという点である。ファウラーがこの場面について、「ネルソンが人種の違いを認識できないことは、その違いが文化的に課せられるかぎりにおいてしか存在しないことを示唆している。すなわち、ネルソンはそう教えられるまでは人種的な他者を見ないのだ」（“Deconstructing” 24）と的確に指摘するように、この一連のやりとりが明らかにするのは、人種間の差異が文化的に構築されたものであり本質的なものではないということである。

通り過ぎた「男性（ア・マン）」が「黒ん坊（ニガー）」であると祖父に教えられたネルソンは、次に引用するようにその黒人男性に対して憎しみを抱く。Richard Giannone はその反応について、ネルソンが人種差別意識を獲得したあらわれである

と述べているが（“Flannery” 56–57）、はたしてそうだろうか。ネルソンが抱いた感情は、次のようなものである。

> He felt that the Negro had deliberately walked down the aisle in order to make a fool of him and he hated him with a fierce raw fresh hate; and also, he understood now why his grandfather disliked them. He looked toward the window and the face there seemed to suggest that he might be inadequate to the day’s exactions. (*CW* 216)

ヘッド氏に無知だと嘲られたネルソンは、通り過ぎた黒人男性に対して「激しく、生々しい、新たな憎しみ」を抱く。たしかに、「黒んぼ（ニガー）」と名指された人物に対して「憎しみ」を向けることは、ネルソンが人種差別意識を得た証のように見えるかもしれない。だが、ここでネルソンが示す感情は、人種差別意識によるものであるというよりもむしろ、ジョイナーが指摘するように、恥をかかされたということに起因するものだといえるのではないか（40, 42）。ネルソンの「憎しみ」が「馬鹿にされた」ことに対する屈辱感から生じたものであるとするならば、そもそもネルソンの「無知」をあげつらい侮辱したのは、通りすがった黒人男性ではなく、ヘッド氏であった。つまり、ネルソンの抱いた「憎しみ」は、祖父から受けた屈辱に対する憤りを、そのきっかけを与えることになった黒人男性への「憎しみ」にすり替えたものに過ぎない。つまりこの後づけの「憎しみ」は、その黒人男性を「他者化」することに失敗した恥辱に起因するのだ。この出来事が結果的にネルソンにもたらしたのは、自らが白人であることに基づく優越感ではなく、また恥をかかされるのではないかという不安であり無力感であった。

上記の引用でネルソンは、「祖父がなぜ彼らを嫌うのかを理解した」というが、もし祖父と孫の憎悪のありかたに似たところがあるとするならば、ヘッド氏が「彼らを嫌う」のも、なにかしらの鬱屈した思いを、黒人に対する「憎しみ」へと転化しているからだといえるだろうか。ネルソンに対

しては傲慢な態度を示すヘッド氏であるが、その関係性を離れて外の社会と接触しようとするとき、内心では彼もまた、軽んじられ、自尊心を傷つけられることを極度に恐れている。それはたとえば、ネルソンと列車を待つ場面でのヘッド氏の心情にあらわれている。普段は通過する田舎の連絡駅で列車を止めて自分たちを乗せてもらうために、ヘッド氏は前もって鉄道会社の係員と特別の取り決めをしていた。しかしその朝ネルソンと列車を待ちながらヘッド氏は、自分のためには列車が止まらないのではないかと不安に思い、もしそうなればネルソンに侮辱されるだろうと心配する（*CW* 213）。さらに列車が近づいてきても、それが停車するかどうかが心配で、「もし列車がのろのろ通過したら、自分はいちだんと大馬鹿のように見えるだろう（“he felt it would make an even bigger idiot of him if it went by slowly”）」と不安に思う（213）。そしてさらにアトランタに着いても、ヘッド氏はどの店舗にも決して入ろうとはしない。街で散財するだけの経済的余裕がないということもあるだろうが、かつて初めてアトランタを訪れたときに「大きな店のなかで迷い、多くの人に侮辱されたあとにやっと外に出る道を見つけた（“he had got lost in a large one and had found his way out only after many people had insulted him”」経験が、ヘッド氏を怯えさせるのだ（219）。

ヘッド氏が抱く侮辱に対する不安は、貧しい白人（プア・ホワイト）が南部社会の下層に位置づけられ、侮蔑の対象とされていたことと結びつくであろう。だとすればヘッド氏が黒人に示す嫌悪は、彼が受けた屈辱を黒人への侮蔑に転化したものだといえるのではないか。Grace Elizabeth Haleが述べるように、南部隔離社会は、黒人の人種的劣位性を前提とすることで、白人間のジェンダーや階級の差異を超えた「集合的な白人」というアイデンティティを作りだしていた（8–9）。黒人のいない環境に長く暮らしてきたことで白人性が曖昧となっているヘッド氏が、アトランタへの旅において過剰なまでに黒人に対する侮蔑の言葉を繰り返すのも、自分がそのように「他者」を名指せるということによって、白人が優位であるはずの社会において、彼が

その優位な側にあることを示すことができるからであろう。

ヘイルはまた、南部再建期後の人種隔離社会において鉄道が、白人の求める人種秩序体系が実現され可視化される場となっていたと指摘する（128–130）。この作品でそれが明確に示されるのは、食堂車におけるエピソードにおいてである。初めて見た黒人男性を「黒ん（ニガー）ぼ」だと認識することができなかったことで不安を感じていたネルソンであったが、次に食堂車で人種隔離がおこなわれている様子を目にすることで、束の間の安心を得ることになる。ネルソンには見えなかった差異が、食堂車では視覚化されているのである。ヘッド氏に連れられて列車内を見学していたネルソンは、「最もエレガントな車両（“the most elegant car in the train”）」（*CW* 217）である食堂車の入口から、先ほどの裕福な黒人の一行が薄いカーテンで仕切られた向こう側で食事をしている様子を目にする。そこでヘッド氏が「あいつらは隔離されてるんだぞ（“They rope them off”）」（217）と説明するのである。この場面についてヘイルは、ヘッド氏たちは実際には「食堂車を利用する金銭的余裕もない」のだが、その「薄い黄色の布」が「黒人男性の経済的豊かさを囲い込んで隔離」することで、ヘッド氏やネルソンの「優越性、彼らの所属、彼らの白人性を保持している」と鋭く指摘する（131）。ここに描かれるのは、黒人奴隷制度が奴隷とされるべき「黒人」をつくり出していたように、人種隔離という制度によって「黒人」と「白人」という人種が明示的につくり出されるさまであり、南部社会における黒人の「他者化」が機能しているさまである。この後に続くやりとりでヘッド氏が黒人を揶揄するような冗談を口にし、周囲のおそらくは白人と思われる乗客たちの笑いを取り、ネルソンが祖父にこれまでにないほどの信頼感を抱くのも、カラーラインが視覚化された空間が二人に「集合的な白人」としての白人性を付与した安心感が背景にあると考えられる。それゆえ、列車という極めて秩序立てられた人種隔離空間から離れ、アトランタの街の雑踏に紛れ込むと、ヘッド氏は駅の位置を見失うまいと繰り返しふり返ることになる（219）。「迷う」ことを恐れるヘッド氏にとって駅から延びる鉄道は、

彼らを白人の側に位置づけながら故郷へと連れ戻してくれる命綱である。

そしてこの作品で鉄道と対照的なイメージを持つのが「下水溝（“the sewer system”）」である。駅を離れてしばらくし、ネルソンがアトランタに慣れてきた様子を示すことが面白くないヘッド氏は、彼に下水溝をのぞき込ませて都会の怖さを教え込もうとする。ヘッド氏曰く、都会の地下にはりめぐらされた下水溝は、「人間がすべり込むと、果てしない暗闇のトンネルに吸い込まれてしまう（“how a man could slide into it and be sucked along down endless pitchblack tunnels）」ようなもので、「都会では誰であろうと、いつなんどき下水溝に吸い込まれるかもしれず、そこからは二度と音沙汰がなくなる（At any minute any man in the city might be sucked into the sewer and never heard from again”」（220）ような恐ろしいものである。人が永遠に暗闇に吸い込まれるという下水溝のイメージは、そこに落ちたものの存在の不可視化という、いわば社会的な死を想起させるものである。この作品において下水溝をめぐるイメージは、本稿で後に見ていくように、中盤においてはネルソンが滑り落ちていくように感じる「真っ黒なトンネル（a pitchblack tunnel）」（223）に結びつき、さらに終盤においてはヘッド氏自身が「飛び込んで流されてしまいたい（“he would drop down into it and let himself be carried away”）」（228）と思うに至る重要なモチーフとなっている。

さて、ヘッド氏にとってこの旅は、自らが「導き手」となることで、ネルソンの思い込みを正すことを目的としたものだった。だがネルソンを連れて歩き始めたヘッド氏は、「導き手」になるどころか、まもなく頼りにしていた駅を見失い、次第に粗末な建物の並ぶ、黒人が多く暮らす地区へと迷い込む。もしここでヘッド氏が、食堂車のときのように自らの白人優位性を示すことができれば、ネルソンからの信頼を勝ち得たかもしれない。だが街なかには「薄い黄色の布」は存在しない。食堂車では仕切りの向こう側に追いやられた黒人たちを差別的な視線でまなざす側にあったヘッド氏とネルソンは、迷い込んだ黒人居住区では物珍しげに「見られる」側に

置かれる。黒人の子どもたちは「彼らを見るために（“to look at them”）」（221）していた遊びをやめ、黒人向けの商店が立ち並ぶ通りを過ぎるときには「黒い顔から黒い目が、あらゆる方向から彼らを見ていた（“Black eyes in black faces were watching them from every direction”）」（221）。ここに描かれる黒人たちは、ヘッド氏とネルソンに対して、ジム・クロウ体制下で黒人に要求される、白人にへつらうような態度を示してはいない。人種間のマナーと呼ばれる慣習が、それぞれの役割が繰り返し演じられることにより成り立つものであるとすれば、ここではそのマナーは機能していないのである[6)]。つまり、ヘッド氏とネルソンはこの黒人たちにとって「よそ者」であるものの、「白人」としての扱いは受けていないのだ。南部社会における貧しい白人（プア・ホワイト）について Nancy Isenberg は、Howard Odum の研究成果を論じるなかで、かねてより南部社会の底辺に位置づけられた貧しい白人（プア・ホワイト）は、二十世紀に入っても「はぐれた種族（“adjudged a breed apart”）」で「白人と黒人のあわいにいる曖昧な階級（“an ill-defined class halfway between white and black”）」とみなされていたと指摘する（226）。ヘッド氏とネルソンが「白人」にも「黒人」にも属せない曖昧な存在であることは、市電の線路脇での様子を描いた次の場面に象徴的にあらわされる。

> They stood on the corner and neither looked at the Negroes who were passing, going about their business just as if they had been white, except that most of them stopped and eyed Mr. Head and Nelson. (*CW* 223–224)

「自分たちのすべきことをする」黒人たちが「まるで白人であるかのよう」

6）オコナーは小説を書く際に南部の「習俗（“manners”）」を描き出すことを重視している。たとえば拙論において、初期短編 “The Geranium”（1946）における人種間の “manners” に関して、南部家父長制の構築との関わりという観点で論じている（久保 33–51）。

である一方で、市電にも乗れずその場に「立ちつくす」二人は、まるで白人でも黒人でもないかのようである。そのような二人を黒人たちが、立ち止まってまで「じろじろ見てくる」のに対して、二人は自分たちが劣位に置かれた「よそ者」であると認識しているかのように、黒人たちのほうを見ることもできない。二人は互いのあいだだけでは、黒人たちを「黒ん坊（ニガー）」と差別的に呼んでいるが、その言葉には「薄い黄色の布」のような実行性はない。アトランタの街なかでヘッド氏は、ネルソンに「他者化」の「前例」を自ら示すことができないままである。

ではアトランタでの出来事は、ネルソンの人種意識にはどのような影響を与えただろうか。列車の通路で初めて出会った黒人男性を「黒ん坊（ニガー）」と認識できなかったという無力感は、食堂車での出来事を経た後もネルソンにつきまとい、彼の黒人に対する判断は不安定なままである。アトランタに着いたネルソンは、「ペンキを塗っていない、木像の部分が腐っているような（“all unpainted and the wood in them looked rotten”）」家々が立ち並ぶ黒人居住区では、「黒ん坊（ニガー）たちは、こういう家に住んでるんだな（“Niggers live in these houses”）」と、他の地区と比べて彼らが粗末な家に暮らしていることに納得しているような素振りを見せる（221）。

だがその一方で、ヘッド氏に促されて黒人女性に道案内を求めて話しかけたとき、ネルソンは再び「他者化」に失敗するのである。一軒の家の戸口に立っていた黒人女性に駅までの道を尋ねたネルソンは、その女性に強く惹かれてしまうのである。彼は「自分の息がその女性の黒い目に吸い上げられる（“his breath drawn up by the woman’s dark eyes”）」ように感じ、女性がからかうような返答をしても、「あまりに力が抜けていて、顔をしかめることさえできず（“too paralyzed even to scowl”）」、そのまま女性の両膝から額、首筋、胸、腕、そして髪に隠れる指へと、その姿を目で追ってしまう（222–223）。そして次のような感覚を覚えるのである。

He stood drinking in every detail of her. … He suddenly wanted her to

> reach down and pick him up and draw him against her and then he wanted to feel her breath on his face. He wanted to look down and down into her eyes while she held him tighter and tighter. He had never had a feeling before. He felt as if he were reeling down through a pitch-black tunnel. (223)

ネルソンがこの女性に惹きつけられる背景には、たとえばファウラーが指摘するように、母親を知らないネルソンがその代わりを求める思いがあると考えることができるだろう（“Deconstructing” 25）。ファウラーは、フロイトの精神分析的な理論を用いて、この女性が、「男根期あるいは前エディプス期における母親」のイメージを持って描かれているのだと解釈する（26）。そしてネルソンがこの女性に求めているのは、「文化によって分離や他者性や差異が押しつけられる以前の原初の融合」であるとし、そのため「女性器／産道のあらわなイメージ」である「真っ黒なトンネル」をさかのぼって「彼が本当に生まれた場所」に戻ろうとしているのだと論じている（26）。

ファウラーのいう「原初の融合」を求める思いとはつまり、ヘッド氏によって学ばされた人種差別の教えを捨て、南部白人としての自己を確立することを放棄してしまいたいという願望ともいえるのではないか。そしてこの「真っ黒なトンネル」に「排水溝」のイメージを重ね合わせるとすれば、ネルソンはここで、「排水溝」のなかへと消え去りたいという、いわば社会的な死を望む衝動を抱えてしまったといえるだろう。黒人女性に「向こうに一ブロック行けば、駅に行く市電に乗れるよ（“You can go a block down yonder and catch you a car take you to the railroad station”）」と、自分たちを「集合的な白人」の側に位置づける「鉄道駅」へつながる道筋を示されてもネルソンは、「ヘッド氏に乱暴に引き剝がされなければ、その女性の足元に崩れ落ちるところだった（“would have collapsed at her feet if Mr. Head had not pulled him roughly away”）」（*CW* 223）とあるほど強く、

その黒人女性に惹きつけられているのだ。そしてその思いがネルソンの内側にあり続けることは、彼の「しばしばかすかに震える口元（“From time to time his mouth trembled slightly”）」（223）や、その後道端で居眠りしてしまった彼が「ぼんやりとした騒音や黒いものが、自分の身体のなかのどこか暗いところから明るみにせり上がってくるのをなかば意識していた（“half conscious of vague noises and black forms moving up from some dark part of him into the light”）」（225）というように、彼の身体的な違和感として、その後も断続的に示されることになる。

それぞれが旅の目的を果たせないまま、作品の後半において二人のあいだに亀裂が生じる。黒人女性に対する態度をヘッド氏に侮辱されたネルソンは、南部社会への参入の難しさを認めるように、声を震わせ「ここに来たいなんて一度もいったことはない（“I never said I wanted to come”）」といい、初めて「家に帰りたい（“I want to go home”）」と口にする（224）。このときのネルソンは、ふがいない祖父を責めながらも唯一の肉親として頼りにし、二人きりの小さなコミュニティである “home” に戻ることを望んでいたのだろう。だがヘッド氏はそのような変化にも気づかず、疲れて道端で眠り込んだネルソンをその場に置き去りにし、懲らしめようとする。目覚めて祖父が見当たらないことに慌てたネルソンが、祖父を探してやみくもに走った挙げ句に年配の白人女性と衝突し、騒ぎが生じる。その女性に「あんたの子が、わたしのくるぶしを痛めたんだよ（中略）警察を呼んで！（“Your boy has broken my ankle!” … “Police!”）」と責め立てられたヘッド氏は、「おれの子じゃない。（中略）この子を一度も見たことがない（“This is not my boy,” … “I never seen him before”）」（226）とネルソンとの関係を否定するのである。ヘッド氏は、孫が自分との関係を唯一のアイデンティティのより所にしようとしたときに、彼を置き去りにしただけでなく、自分の助けをもっとも必要としたそのときに、そつながりそのものを否定したのである。ペトロによるイエスの否認を思わせるヘッド氏の裏切りの言葉を聞いた途端に、それまで祖父の腿に食い込んでいたネルソ

ンの指は離れていく。またネルソンに対するヘッド氏の非情な振る舞いは、二人を取り囲み憤慨していた女性たちに「（捕まえるためにヘッド氏に）手を触れることにも耐えられない（“could not bear to lay hands on him”）」ほど「強い嫌悪（“so repulsed”）」を感じさせる（226）。アトランタの旅においてヘッド氏は、黒人を劣位に置くことも白人女性たちを従えることもできないのだ。

自分を家父長として扱ってくれる可能性を持つ唯一の存在であるネルソンとのつながりを否定することは、ヘッド氏にとっても自らのアイデンティティのより所を失うことを意味する。にもかかわらずヘッド氏がネルソンを否定したのはなぜか。たしかにこの行為は、なんにせよ恥をかかされるような思いをしたくはない、という彼のそれまでの態度の延長線上にあるものかもしれない。だが同時にその背景には、警察に対する彼の強い恐怖心があるだろう。ネルソンが衝突した女性は、繰り返し警察を呼ぶように訴え続けるが、「これまで一度も警察に呼び止められたことがない（“He had never in his life been accosted by a policeman”）」ヘッド氏は、彼女の訴えを聞いては怯え「その目を恐怖心と警戒心でどんよりと曇らせ（“his eyes were glazed with fear and caution”）」ながら、ネルソンの指を引き剝がそうと必死になり、ついには「背後から警官がやってくると感じとり（“Mr. Head sensed the approach of the policeman from behind”）」、ネルソンを「知らない」と否定するのである（226）。だが実際には、目の届く範囲に警察の姿などなかった。再建期以降の南部社会において、黒人だけでなく貧しい白人（プア・ホワイト）とされた人々も軽犯罪であろうとも厳しい判決を受け、長期間の労役に服す可能性があった（Isenberg 207）。ヘッド氏のこの極度の怯えは、そうしたこととも無関係ではないだろう。そのような怖れが、ヘッド氏の裏切りの言葉につながったとすれば、窮地にあるネルソンを見捨てるという彼の利己的な判断に、南部社会における貧しい白人（プア・ホワイト）の不安の一端を見ることができるだろう。

オコナーの作品において繰り返し描かれるのは、登場人物の凝り固まっ

た自己認識が揺るがされる瞬間であり、その衝撃である。アトランタへの旅は、「導き手」を自任していたヘッド氏の自尊心を打ち砕くことになる。ネルソンを否定したことで面目を失ったヘッド氏は、なんとか孫の気持ちをなだめようと、コカ・コーラを飲もうと誘い、道端の水道栓から一緒に水を飲もうと声をかけるが、ネルソンは応じず、祖父を許そうとはしない（*CW* 227–228）。孫とのつながりを失ったヘッド氏は、「すべての望みを失い（“he lost all hope”）」、「もし下水溝の口を見つけたら、そのなかに飛び込んで流されてしまおう（“if he saw a sewer entrance he would drop down into it and let himself be carried away”）」と考える（228）。これまでどの街区にも馴染むことなく歩き続けてきた二人の様子は、アトランタに彼らの居場所がどこにもないことを暗示していたが、ネルソンを否定することでヘッド氏は、ついに “home” をも失ってしまうのである。そして初めて、恥をかかされることを何よりも嫌うヘッド氏が、通りすがった白人男性に向かって両手を振り「道に迷った！（“I’m lost!”）」と大声で助けを求めるのだ。「私は道に迷って、どこにいるのかもわからない。この子と私は、この列車に乗らなきゃならないんだが、駅も見つけられない。ああ、すっかり迷ってしまった！　助けてください。道に迷ったんです！（“I’m lost and can’t find my way and me and this boy have got to catch this train and I can’t find the station. Oh Gawd I’m lost! Oh hep me Gawd I’m lost!”）」と（228）。ここには、その朝ネルソンに向かって「わしが道に迷うのをおまえ見たことがあるか（“Have you ever, … seen me lost?”）」（211）と誇っていたヘッド氏の姿はない。ヘッド氏がここで「失って（“lost”）」いるのは、駅までの道筋だけでなく、南部社会に自らを位置づけるはずのすべであり、その朝まで自信に満ちていた自分自身であるだろう。

ヘッド氏に自分との関係を否定されたネルソンもまた、自らを南部社会に位置づけるより所を失うことになる。ネルソンの様子を、語り手は次のように描写する。

> As for Nelson, his mind had frozen around his grandfather's treachery as if he were trying to preserve it intact to present at the final judgment. He walked without looking to one side or to the other, but every now and then his mouth would twitch and this was when he felt, from some remote place inside himself, a black mysterious form reach up as if it would melt his frozen vision in one hot grasp. (228)

この引用箇所にあるようにネルソンは、祖父の「裏切り」を「冷凍保存」することで、それを盾に祖父に対し優位に立ち続けることができたかもしれない。だがここでまた、ネルソンの内側から「黒い不可思議なもの」がせり上がってくる。そしてそれが、この「凍りついた」ネルソンのもくろみを「熱気で一度に溶かして」しまうように感じている。もしこの「黒いもの」がネルソンの内側に生じていた、ファウラーのいう「原初の融合」（41）を求める思いだとすると、ネルソンはここで、祖父が自分に学ばせようとする南部社会のありようのすべてを、拒もうとしているといえるだろうか。そうであればネルソンにとって、家父長たらんとする祖父と暮らす "home" は無意味なものとなる。ようやく白人男性に道を尋ねて教えてもらった祖父が、帰宅できる目処がたったことに安堵して「さあ、家に帰るぞ！（"We're going to get home!"）」と声をかけたときに、ネルソンの目には光もなく何の興味も感情も浮かばない（229）。「家は彼にとってなんでもなかった（"Home was nothing to him"）」（229）と、語り手によって内面が明かされるように、このとき、祖父の孫であるというアイデンティティは、ネルソンにとって意味をなくしているのである。

だが作品の終盤、"home" の意味を失っていたはずのネルソンがヘッド氏に、「おれたちがまた迷わないうちに、家に帰ろう（"Let's go home before we get ourselves lost again"）」（230）というのである。ネルソンの心境にそのような変化を引き起こしたのは、その直前の場面に描かれる、ある家の前に置かれ、ヘッド氏にも大きな影響を与えることとなる「黒人の人形

(the plaster figure of a Negro)」(229) との遭遇である[7)]。おおよそ「ネルソンぐらいの大きさ (“about Nelson’s size”)」のその像は、高級住宅地の邸宅の前庭の壁に取り付けられたローン・ジョッキーの一種だと思われるが、取り付けるための接着剤がひび割れているせいで、不安定な角度で前に傾き、また片方の目は欠けて白く、手に茶色く変色したスイカを持っている (229)。この像を目にしたヘッド氏は息を呑み「作りものの黒(ニガー)んぼだ！ (“An artificial Nigger!”)」(229) と声をあげる。ヘッド氏とネルソンが目にした像は、次のように描写されている。

> It was not possible to tell if the artificial Negro were meant to be young or old; he looked too miserable to be either. He was meant to look happy because his mouth was stretched up at the corners but the chipped eye and the angle he was cocked at gave him a wild look of misery instead. (229)

スイカを手にして幸せそうな笑顔をうかべるというこの黒人の像は、スイカ好きの黒人という人種差別的ステレオタイプに基づいたものであり、スイカ一つでよろこぶ単純で御しやすい黒人という、白人の黒人に対する揶揄と願望をあらわした置物といえよう。この像を見てヘッド氏がはっとしたのは、これがこの旅で出会うことのできなかった、自らの頭のなかにあった「黒(ニガー)んぼ」の似姿だからではないだろうか。実際に目にしてきた黒人のなかに「黒(ニガー)んぼ」を見いだせなかったヘッド氏にとって、自分の探していた「黒(ニガー)んぼ」をついに発見したという思いと同時に、結局それは「つくり

7) この黒人の像を目にしたヘッド氏は、にわかに「神の恩寵の働き (“an action of mercy”)」(230) を感じ、ついに作品の最後では自らが「天国に入れるようになった (“felt ready … to enter Paradise”)」(231) と自覚する。これにより、南部社会における居場所を「失って」いたヘッド氏が、神に見いだされることによって自らの居場所を得たと考えることもできるだろう。本稿では南部社会における人種意識の構築に焦点をあてるため、ネルソンの変化に着目する。

もの（“artificial”）」であったという認識が、彼が思わず口にした「つくりものの黒ん（ニガー）ぼだ！」という表現に図らずも示されている。この像の「幸せそうに見える」はずの口角の上がった口元が「ひどく悲しげな様子」であるという描写からは、白人の思うように振る舞うことを強いられる黒人の抑圧された姿がうかがえるが、と同時にこの像が哀れみをさそうほどに朽ちていることは、白人が抱く「黒人像」が、現実の黒人の姿とは大きく乖離したまま形だけそこに残されていることを暗に示しているのではないか。

一方、それまでは“home”とも祖父とも関係も失っていたネルソンであったが、祖父が「つくりものの黒ん（ニガー）ぼだ！」と呼ぶこの像を目にした後に、「つくりものの黒ん（ニガー）ぼだ！」と「ヘッド氏とまったく同じ調子で（“in Mr. Head’s exact tone”）」で繰り返すのである（229）。祖父の言葉はネルソンに、このスレテオタイプ化された黒人の像こそが祖父が「黒ん（ニガー）ぼ」と名指すものであることを伝える。だがすでにネルソンはこの旅で、それがほんものの黒人とは異なることを学んでいた。ネルソンが繰り返した「つくりものの黒ん（ニガー）ぼだ！」という言葉は、祖父の教えようとした「黒ん（ニガー）ぼ」とはこういうものであったのかという発見と、それは「つくりもの」としてしか存在しないのだという認識のあらわれではないだろうか。そして語り手は、黒人の像を前にした二人を「ヘッド氏は老いた子どものようで、ネルソンは小型の老人のようだ（“Mr. Head looked like an ancient child and Nelson like a miniature old man”）」（230）と描写することで、二人と「若者のつもりなのか老人のつもりなのかわからない」黒人の像との類似性を浮かび上がらせ、黒人の像の黒人性が虚構であるのと同時に、それに依拠して構築しようとした彼らの白人性も虚構であることを強調する。こうして、もとより稀薄であった二人の白人性は、その虚構性において自らの映し鏡でもあるこの像を前にして、いっそう曖昧な「つくりもの」となるのである。

そのような二人をかろうじて「集合的な白人」の側に位置づけなおすのが、ネルソンから説明を求められていると感じとったヘッド氏が、咄嗟に

口にした「ここにはほんもののやつが足りないもんだから、つくりものを置かなきゃならんのだ（“They ain’t got enough real ones here. They got to have an artificial one”）」（230）というひと言だろう。高級住宅地に暮らす白人たちもまた、たとえ「つくりもの」であっても「黒ん坊（ニガー）」を必要としているというこの発言は、おなじく「黒ん坊（ニガー）」を必要としているという意味において、都会をさまようなかで南部白人としての足場を見いだせなかった二人の貧しい白人（プア・ホワイト）を、かろうじて「集合的な白人」の側に位置づけなおす。だが祖父の発言に頷くネルソンの「口元が奇妙に震え（“a strange shivering about his mouth”）」（230）ているのは、依然として彼の内側からわき上がってくる「黒いもの」を抑えつけているからではないだろうか。ネルソンは、自分たちの白人性を信じることができないのだ。だからこそ彼は、「おれたちがまた迷わないうちに、家に帰ろう（“Let’s go home before we get ourselves lost again”）」（230）と祖父に告げ、二人は帰宅の途につくことになるのだ。作品の最後は、帰りの列車から降りたネルソンの「一度は行けてよかったけど、もう二度と行かないよ！（“I’m glad I’ve went once, but I’ll never go back again!”）」（231）というひと言で締めくくられる。自らの白人性を問われなければならなかった旅はネルソンにとって、南部白人としてのアイデンティティを帯びることの難しさを学ばせた。そしてこの旅は、二度と「つくりもの」の白人性を意識しなくてもすむように、祖父との閉じられたコミュニティに留まる決心をネルソンにさせるものとなったのである。

3. 朽ちた黒人の像が示すもの

白人の暮らす街区に置かれた黒人の像の存在は、James Baldwin が 1963 年のインタビューで提起する問いを思い起こさせる。

> What white people have to do is try to find out in their own hearts why it was necessary to have a “nigger” in the first place, because I am not

> a nigger, I'm a man. But if you think I'm a nigger, it means you need him. The question that you've got to ask yourself, the white population of this country has got to ask itself, North and South because it's one country and for a Negro there is no difference between the North and the South … if I'm not the nigger here and you invented him, you the white people invented him, then you've got to find out why. (108–109)

「私は a "nigger" ではない、"a man" だ」とボールドウィンはいう。そして「もしあなたが私を "a nigger" だと思うのなら、それはあなたが彼（"a nigger"）を必要としているということだ」と述べる。さらに、「必要としている」からこそ「あなたたち白人が彼（"a nigger"）を発明したのだ」と。このボールドウィンの指摘は、まずはこの作品におけるネルソンの経験と重なり合う。列車のなかで黒人男性を目にして "a man" だと認識したネルソンは、祖父の教えにより、彼を "a nigger" だと認識しなければならないと知った。南部白人として社会に参入するには、"a man" を "a nigger" と見る必要があるのだ。だが旅を通してネルソンは、その社会参入の枠組みそのものが虚構であることにも気づくことになった。そして、ボールドウィンの「そもそもなぜ、あなたたち白人は "a nigger" を発明しなくてはならなかったのか」という問いは、黒人の像を前にしたヘッド氏の「ここにはほんもののやつが足りないもんだから、つくりものを置かなきゃならんのだ」という説明と響き合う。ボールドウィンが "a man" であって "a nigger" ではないように、ほんものの「黒ん坊（ニガー）」などいないのだ。南部白人という人種意識を構築するには、「つくりものの黒ん坊（ニガー）」というイメージに、たとえそれが朽ちていたとしても、頼るほかないのである。

モリスンは、黒人を劣位に位置づける論拠の一つとされてきた科学的人種主義の目的について、「よそ者」を定義することによって自分自身を定義することだと述べ、オコナーが作品においてそうした「他者」の構築のあ

りようを鋭く描き出していると評価する（*Origin* 6, 19）。そのようなオコナーが “The Artificial Nigger” で焦点をあてているのは、そもそも「他者」となるはずの対象が見いだせないという事態であった。ヘッド氏とネルソンは、アトランタの旅において「黒ん(ニガー)ぼ」を見つけ、南部白人としての自己を確固たるものにするつもりであった。だが、アトランタで実際に多数の黒人たちを目にしながらも、二人に南部白人らしい振る舞いを可能にさせるような「黒ん(ニガー)ぼ」の役割を演じる人物はどこにも見いだせなかった。この作品に描かれるのは、黒人を「他者化」することによって築かれるはずの足場を見いだせない、南部の貧(プア)しい白人(ホワイト)の姿である。

だが、黒人の像の存在によってその白人性の曖昧さが浮き彫りになるのは貧(プア)しい白人(ホワイト)だけではないだろう。高級住宅地に置かれた朽ちた黒人の像が象徴するように、「黒ん(ニガー)ぼ」を必要としているものこそが南部白人であることを、この作品は描き出しているからだ。この作品のタイトルに含まれる “Nigger” という人種差別表現について、編集に携わっていた John Crowe Ransom から、「黒人の感情を傷つけない」（Fitzgerald 180）ためにタイトルを変更してはどうかと示唆されたオコナーは、返信の書簡において、必要であればもちろん変更も構わないと代案をいくつか示しながらも、次のように述べる[8)]。

> I don’t think the story should be called anything but “The Artificial Nigger.” But if this title would embarrass the magazine, you can of course change it. I think the story as a whole is much more damaging to white fork’s sensibilities than to black; and that if I must eliminate the title, I must eliminate it everywhere in the story. (Fitzgerald 181)

8） 1955 年 1 月 12 日付のこの書簡のなかでオコナーは、自らが同様の置物を目にしたことを次のように述べている。“I have seen these plaster figures sitting on the walls of elegant houses in Atlanta and they are often not kept up but chipped and disfigured etc.” (Fitzgerald 181)

オコナーは「この作品が全体としてよりダメージを与えるのは、白人の感情であって黒人ではない」という。このオコナーの見解が示しているのは、南部の人種の問題が黒人の問題ではなく白人の問題であるという認識であるだろう。本稿で論じてきたように、オコナーがこの作品で示したのは、「黒ん(ニガー)ぼ」という表現が、その対象を持たない空疎な「つくりもの」であるさまである。それゆえ作品中でヘッド氏がその言葉を不必要なまでに繰り返すとき、彼の言動を通して、その空疎な「つくりもの」にしがみつく南部の貧(プア・ホワイト)しい白人の虚しい姿が滑稽なまでにむき出しになる。だがオコナーの作品において、貧(プア・ホワイト)しい白人や白人(ホワイト・トラッシュ)のくずとして描かれる人々はいつも、彼ら／彼女らを見下す階級の白人たちの映し鏡である。壁から外れそうなほどに朽ちて傾いだ黒人の像にしがみついているのは、南部白人社会そのものであるだろう。そのことを「つくりものの黒ん(ニガー)ぼ」は雄弁に示しているのだ。

＊　本論文は2021年度特別研究（半期）「アメリカ南部とフラナリー・オコナー」の成果の一部である。

引用文献

Baldwin, James. *I Am Not Your Negro*, edited by Raoul Peck, Vintage, 2017.

Duvall, John N. *Race and White Identity in Southern Fiction: From Faulkner to Morrison*. Palgrave Macmillan, 2008.

Faulkner, William. *Collected Stories of William Faulkner*. Vintage, 1995.

Fitzgerald, Sally. Letter to the Editor. *Flannery O'Connor Bulletin,* vol. 24, 1994–95, pp. 175–82.

Fowler, Doreen. "Deconstructing Racial Difference: O'Connor's 'the Artificial Nigger'." *The Flannery O'Connor Bulletin*, vol. 24, 1995, pp. 22–32.

———. "Death, Denial, and the Black Double." *The Mississippi Quarterly*, vol. 69, no.3, 2016, pp. 303–26.

Freeman, Elizabeth. "'The We of Me': *The Member of the Wedding's* Novel Alliances." *Women & Performance: A Journal of Feminist Theory*, vol. 8, no. 2, 1996, pp. 111–135.

Giannone, Richard. "'The Artificial Nigger' and the Redemptive Quality of Suffering." *The Flannery O'Connor Bulletin,* vol. 12, 1983, pp. 5–16.

———. "Flannery O'Connor Tells Her Desert Story." *Religion & Literature,* vol. 27, no. 2, 1995, pp. 47–68.

Hale, Grace Elizabeth. *Making Whiteness: The Culture of Segregation in the South, 1890–1940*. Vintage, 1999.
Isenberg, Nancy. *White Trash: The 400–Year Untold History of Class in America*. Viking, 2016.
Joiner, Jennie J. "Constructing Black Sons: William Faulkner's 'Barn Burning' and Flannery O'Connor's 'the Artificial Nigger'." *Flannery O'Connor Review,* vol. 8, 2010, pp. 31–47.
McCullers, Carson. *The Member of the Wedding*. Houghton Mifflin, 1946.
Morrison, Toni. *Playing in the Dark*. Vintage. 1992.
———. *The Origin of Others*. Harvard UP, 2017.
O'Connor, Flannery. *The Habit of Being: Letters of Flannery O'Connor*, edited by Sally Fitzgerald. Farrar, 1979.
———. *Flannery O'Connor: Collected Works*, edited by Sally Fitzgerald, Library of America, 1988.（フラナリー・オコナー『オコナー短編集』須山静夫訳、新潮文庫、1974 年、フラナリー・オコナー『フラナリー・オコナー全短篇 上』横山貞子訳、筑摩書房、2003 年）
O'Donnell, Angela Alaimo. *Radical Ambivalence: Race in Flannery O'Connor*. Fordham UP, 2020.
Perreault, Jeanne. "The Body, the Critics, and 'The Artificial Nigger.'" *The Mississippi Quarterly*, vol. 56, no. 3, 2003, pp. 389–410.
久保尚美「フラナリー・オコナーの "The Geranium" における "manners" と南部家父長制の構築」『中央大学文学部紀要　言語・文学・文化』、第 128 号、2021、33–51 頁 .